

みちのく最上川！  
森・里・川・海共育プラン  
ツーリズムガイド  
＜学習ハンドブック編＞



NPO法人 里の自然文化共育研究所

当事業は平成20年度日本財団の助成を受けて実施されました。



日本財団  
The Nippon Foundation

助成事業

# 目次

みちのくの森・里・川・海の学び・・・3  
活動位置マップ・・・4

## I . 理論編

地域調査のポイント・・・6  
1、里地里山とは？・・・7  
2、事前の準備・・・10  
3、地域に入るにあたって・・・12  
4、フィールドワークのテクニック・・・16  
5、調査の整理方法・・・18  
6、成果物の還元と地域づくりへの貢献・・・24

## II . 実践編

1、里山・・・26	7、ものづくり・・・44
2、川とため池・・・28	8、民話・・・46
3、田んぼ・・・30	9、海と海辺・・・48
4、畑・・・32	10、ホームステイ・・・50
5、里地里山ビオトープ・・・34	11、地元学・・・52
6、食・・・42	

# みちのくの森・里・川・海の学び

～里の自然と文化を体験しながら学ぶ本当に豊かに生きるための智恵と技術～

山形県最上地方から庄内地方をつなぐ最上峡周辺の村々は、霊峰月山を水源とするいくつもの溪流と最上川、そして豊穡な日本海の庄内浜に沿って形成されています。

ここには、手入れされた豊かな里山の恵みと先人が拓いた見事な棚田などの田畑、そして漁村の生業によって人々の暮らしが営まれています。このように人々が自然生態系に働きかけ、それによって豊かな環境と多くの生き物が暮らすための空間ができます。そのような人と自然が織りなす生活空間のことを「里」(里地)と言います。里では、人々の自然や生活文化に関する多くの智恵や技術が受け継がれています。こうしたことが同時に安全で安心な食べ物の生産を支えているのです。

一方、最上峡周辺では冬の3メートルを超える豪雪や地吹雪など厳しい面も持っています。こうした厳しさに対して、里の人々は「結い」と「講」といった集落の共同作業や話し合いなど助け合いの精神(「相互扶助」)で乗り越えてきました。

山、里、川、海のそれぞれの地域で、本当に豊かに生きるための智恵と技術を次世代の子ども達に広く教えつつ、新たな里づくりを行おうと、地域運営学校「里の自然環境学校」を設立し活動を展開しています。みなさんはここでは学習者であると同時に里づくりの外部ボランティアでもあります。地域の人々と体験を共にしながら、楽しい活動と学びをしていきましょう。きっと新しい自分発見があるはずです。

さあそんなみちのく最上峡の楽しい活動プログラムを紹介しましょう。



最上峡周辺の山村 角川の里



# みちのく最上峡周辺の活動位置マップ

山・里から川・海そして都市住民との協働へ  
 「山里川海をつなぐ環境保全活動ネットワークプロジェクト」が始まっています！



## 森里川海共育プラン(連携NPO・地域活動団体位置図)

各地域活動団体や中間支援NPOと連携協働しながら活動を進めていきます。



青: 山形大学関係機関  
 赤: 地域活動団体  
 黄: 中間支援NPO

Image NASA  
 Image © 2008 TerraMetrics  
 © 2008 Europa Technologies  
 © 2008 ZENRIN

© 2007 Google™

ポインティング 38°49'52.04" N 139°59'52.74" E 高度 76 m

ストリーミング 100%

上空 35.23 km



I .理論編～地域調査から実践まで～… p 6～25

II .実践編～里山から海辺まで～… p 26～53



理論編：

- ・調査をいかに地元と共有するか？
- ・協働をどのように紡ぎ出すか？
- ・楽しい活動の基盤となる基礎的知識や技術とは？

実践編：

- ・地域素材を具体的にどのように生かしたらよieldろうか？
- ・「調べる・考える・まとめる・創る・役立てる(吉本哲郎氏談)」の最上庄内の実践を紹介

## 地域調査の ポイント



里地里山での学びはとても楽しく感動的なものであると言えます。里地里山での教育や調査、そこでの体験活動の特徴をいくつか次に挙げてみましょう。

- 1、学びの場である「教室」が一つの地域圏全体であること。したがって、キャンパスの運営は学校関係者だけでなく地域社会の構成員と共に協働して行われることとなります。
- 2、通常、学校で行われる営みは教育が主なものです。しかし里地里山の地域社会での学習主体は生徒や先生だけではなくその地域の住民も同じく研究・教育の主体です。つまり単なる「学習対象」ではないということであり、共に育み学んでいくという「共育」の考え方が大変重要です。
- 3、里地里山での研究・教育活動や体験活動の成果は、単なる学術研究や学生に対する恩恵にとどまりません。地域社会に還元・貢献することが特に求められます。

以上のことを考えてみると、里地里山地域で学びフィールドワークを行いながら地域づくりを展開していくためには、留意しておかなければならない点があるといえるでしょう。特に教育や体験活動における地域社会とのつきあい方に対して、ある面での慎重さとまた同時に学術研究の領域を超えた大胆さが要求されてくると言えると考えられます。

本稿では、里地里山での教育や体験活動、交流活動を行っていこうという指導者や、これから里地里山で学んでいこうという若手の学習者のために、地域社会での基本的な姿勢（地域に参加するものとしての立場性の問題）やフィールドワークをするにあたっての基礎的な技術や知識について概説したいと思います。

しかしこの稿で触れることができるのは、私たちが普段活動している山形県最上地方と庄内地方の地域社会から見てきた本当に基本的なところだけです。実際は様々な地域社会の混沌としたあらゆる状況の中で、住民とともに時に楽しみ、時に泣きながら会得していくしかないものであるとも言えます。つまるところ指導者や学習者の各々の人間性の問題が深くかわることであり、里地里山での活動が常に人間臭く、泥臭く、そして時に大きな感動を持ったものとなるのは、こんなところに理由があると言えるでしょう。

里地里山での学習が真に学生にとっても教職員にとっても、そして地域社会の方々にとっても良い学びの場となり、今後の里地里山作りの発展へとつながるための一助になればと願っています。



# 1、里地里山とは？

## □ 里地里山とは？

農山村のことを「中山間地域」と呼ぶことがあります。とりわけ農林行政でよく使われる言葉です。だがこの言葉のニュアンスには過疎化少子化が進み今後維持が難しい問題含みの地域といったマイナス面を想起させるものがあるようです。この稿では、そうしたマイナスイメージから出発しないで、ふるさとの原風景を残す自然や文化が豊かな地域というとらえ方で「里地里山」という言い方をしたいと思います。里地里山の活動自体が、こうした里地里山の地域社会への可能性を信じ、それを開いていこうという取り組みでもあるからです。

ところで農山漁村の活動フィールドのほとんどすべてが「里地里山」地域であるか、もしくは里地里山に密接な関連を持って暮らしが営まれています。里地里山にはどんな特徴があるのでしょうか？農山漁村は、自然が豊か、文化が豊かと紹介されます。その豊かさがどういう風に成り立っているのかということに改めて考えてみることで、それが見えてくるでしょう。



山形県最上地方の里地里山全景（写真は戸沢村角川地区）

里地里山は里の人々の生存景観だ。人が自然に働きかけてそこに「暮らし」をつくりだした。写真の景観はほとんどすべて人の手が入ることで維持されている。

# 里地里山

## ～「人」と「暮らし」とのつながりとかかわり～

### ● 自然環境

「里地里山」の特徴の第一は自然環境的には原生自然じゃないということです。居住している里の住民が地域の里山や集落周辺の環境に日々働きかけて改造しています。このように人が手を入れている事によって逆に豊かな自然環境が成り立っています。具体的に言うと里山の適正な間伐をしたり、あるいは作業道を作る事によって里山に入っていけるような環境を作ったりして人が継続的に入る。さらにそのすぐ下流部に棚田が作られていて、きめ細かな水路で山の出水をうまく引き込んだり、ため池がいくつもあってそれも水路でつながれたりして成り立っています。それによっておいしい棚田のお米が作られるというわけで、手を入れれば入れるほど豊かな生産性を持つわけです。

これは生態系的な側面すなわち生き物の視点から見ると、人の手を介して多様な水辺環境が整備されているからこそ、対応していろんな生き物が生息できると言えます。例えば私たちが普段活動を展開している山形県最上地方のある集落では、棚田のある一つの地域圏だけで20カ所くらいのため池が作られていたりします、そしてそこにはヌマエビが生息していたり、山の出水の所にはサンショウウオが3種類もいたりします。そんな風に生き物が増えるという働きを持っているのです。

もし原生自然のままであれば強い種だけが残っていくので特定の種類の木だけが生育するような里山になってしまうでしょう。そうするとその植生に依拠した生き物しか生息できないわけです。そうではなくて里の方々が里地里山へ入って継続的に仕事することで、結果としてかく乱作用がおこり非常に豊かな自然環境が形成されるのです。

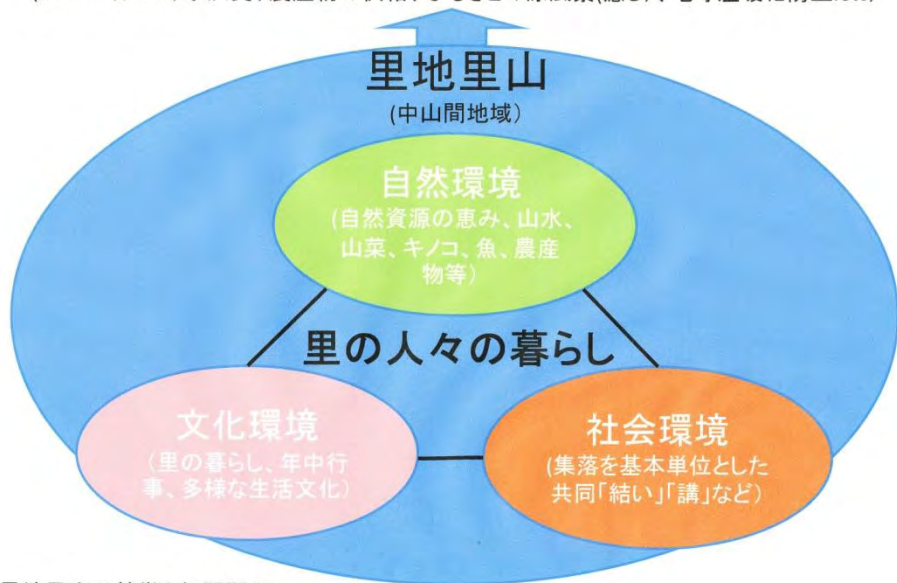
### ● 文化環境

このように人の手が作り出した多様な自然環境によって多くの恵みが生まれます。それが地域の暮らしと関連して多様な里の生活文化が営まれることになります。逆の言い方をすればそうした里の暮らしの生活文化が里の自然環境を作り上げているとも言えるのです。このように里地里山の自然と生活文化は相関関係にあると言えます。とりわけ里地里山の食文化はとて豊かですね。最上地方では、春だけで100種類以上のレシピがあるし、地元のキノコを使った料理もやっぱり100種類くらいあるようです。冬も独自の郷土料理があります。冬は山菜やキノコなどの里山の産物の第2シーズンとも言われます。一年の間にとれたものを上手に保存して冬の郷土料理が作られる、その保存料理の技術や工夫はまさに脈々と受け継がれた生活文化の豊かさを感じさせるものです。



## 多面的・公益的機能の発揮

(地域の暮らし、水涵養、農産物の供給、ふるさとの原風景(癒し)、地球温暖化防止.etc)



里地里山の特徴と相関関係

→  
右図のように里地里山の自然・文化・社会は人々の暮らしを中心に織り成しあひながら形成されている。

そうした山の幸に加えて里で作られた農産物が加わって、非常に多彩な食文化を構成しています。そういった里山からのめぐみとか農業からの恵みというものを地元の方がよく知り尽くし、さまざまな知恵や技術、工夫で暮らしに役立てているというわけです。

### ● 社会環境

こうした取り組みはもちろん1人ではできません。だから里地里山の人々は、「結い」とか「講」とか集落を基本単位にして共同で協力し合い、話し合っってこうした里地里山の自然や文化を力を合わせて維持し整備してきました。そうした仕事を協働で行うために地域には密接な人と人のつながり、里の社会的システムや近所づきあいの風景が存在しているのです。

### ● 現状

こうした里地里山の営みには地域の住民、すなわち「人」と「暮らし」がとても大切な要素であるというのが最大の特徴だと言えます。でも現状は過疎少子化で、非常に危機的状況にあります。このままではいくつもの集落が近い将来消滅してしまうだろうという予測もあります。しかし一方で逆にそういった里地里山の自然や文化、コミュニティ活動の価値が、今まさに新しい形で見直されつつもあるわけです。里地里山のフィールドワークや地域づくり活動はこうした現代的状況にある里地里山からいかに学び、そして住民とともに新たな里づくりにいかにかかわれるかということが大切になります。では私たちはこうした里の人々と共にどんなところからはじめればよいのでしょうか？

## 2、事前の準備～情報収集と装備の決定～

誰でもそうですが、たとえ関心を持った地域であっても、自分の日常生活から離れた地域に入るのは、期待もあれば不安も大きいものです。だから用意のいい人はあらゆる手段を通じて事前に情報収集にかかるでしょう。

考えられる主な情報源は次の通り。

- (1) ホームページ（自治体、NPOなどの活動団体、観光協会、企業、その他もろもろ）
- (2) パンフレット（自治体の紹介パンフレット、地域づくりパンフレット、観光パンフレットなど）
- (3) 文献（新聞・雑誌等の記事、市町村誌、研究文献等）
- (4) 口コミ（すでにその地でフィールドワークを行った人からの話など）

でも、こうした情報を活用する際に、特に次の2点はだけは特に注意しなければなりません。

- (1) その情報が、「誰が誰に対して」「何を何のために」「どのように」発信しているのかということに着目し、そのまま鵜呑みにしないこと。
- (2) 事前に得た情報だけで固定化した地域イメージを作って自分の中に内面化しないこと。

情報には必ずその発信者である主体の偏った見方（バイアス）がかかっています。同じ一つの地域でも人によって語られ方が多様だし、また逆説的ですが、紋切り型のありふれた型にはまった表現もしばしばです。そのような事前情報に自分があまりにも絡め取られてしまうと、せっかく現地に行ってもその情報イメージでしか地域社会を見ることができなくなってしまう。せっかくその地域に行くわけだから自分独自の視点から様々な地域のおもしろさや驚きを見出してきてもらいたい。そのことが、地域の人も気がつかないような新たな再発見へとつながり、地域づくりの新たなアイディアの苗床になる可能性を開くからです。



## □ 現地の人々との最初の接触

現地の受け入れ者からの情報とアドバイスはとても重要だ。特に里づくりに関わる活動の際は、基本的に現地の活動者がいるためこの点はあまり心配のないことが多いが、初期段階からよく話を聞いてどのように自分たちが地域に入ればよいかを把握しておくことが重要でしょう。フィールドワークの基本はなんといっても地元の人たちのことをよく聞くこと。不安なところは受け入れ先や活動事務局となっている現地の人々に電話で直接事前  
に聞いてみるのが重要でしょう。里地里山で活動する現場の人たちはかなり親切に答え  
てくれるし、また地元の人たちにとっても質問を通じて、逆にこちらがどんな人なのか  
確認できることで安心することにもなる。事前に電話を通じての交流やコミュニケーション  
を作っておくことは大変重要です。

このような作業を通じて、地元の人たちのアドバイス等に従って装備を決定していくこと  
になります。

## □ 装備の決定

最低限必要なものは次のとおり。

### ・フィールドノート：

メモをとるためのもの。コンパクトでかつ書ける分量がある程度多くあり、また丈夫なものがよい。筆記用具もできるだけコンパクトなものが便利です。

### ・デジタルカメラ：

現地では多めに写真を撮ることをお勧めします。いざ調査から帰ってみると使える写真が少ないことに気がつくことが多いからです。最初から気がついたことは多めにこまめに記録しておいたほうがよいでしょう。もちろん撮影許可が必要なところはきちんと確認することを心がけましょう。

### ・地図：

必須アイテム。まとめと整理をする際にも使えます。

## □ その他は野外を中心とする調査なのか、屋内を中心とする調査なのかによって装備が異なります。里地里山の野外調査で必要な一般的な装備を紹介しておこう。

- 帽子：頭部を守る為、必ず必要。里山整備作業などの際には、ヘルメット着用が必須。現地で用意しているかどうか確認が必要。
- 着替え：里地里山の活動では結構汚れたりぬれたりする場面が多い。
- タオル・手ぬぐい：汗を拭くだけでなく怪我をしたときにも活用できる。
- 応急処置セット：いざという時のため消毒液、絆創膏、包帯など最低限のもので可。
- 水筒：水分の補給は現場の活動では命にかかわるもの。必ずもちたいアイテム。
- 双眼鏡：もしできれば。山や川などで遠くのことを指し示しての説明もあるため、あれば便利。

## □ 以上まとめると次のようになります。

- ・参考資料：市町村のホームページ、パンフレット、チラシ、地図など。

場合によっては、生き物図鑑等のハンドブックを持参すると便利。

- ・記録するための道具：フィールドノート、デジタルカメラ、ビデオなど。
- ・観察するための道具：双眼鏡、虫眼鏡など。

# 3、地域に入るにあたって

## ～フィールドワークの方針と里の人々との付き合いの流儀～

### ● 最初が肝心～受け入れてもらえなければ始まらない～

里地里山でのフィールドワークや地域活動はとにかく人とのふれあいが重要です。里地里山の自然も文化も社会構成もすべてそこに住んでいる人々が深く関係し、たいていの場合、住民相互のつながりもとても濃いものがあるからです。

だから最初が肝心。まずはフィールドワークでお世話になる方々やその地域社会の人々に受け入れてもらえなければ何も始まらない。どのように里地里山の人々と関係をつくりあげていくかということには、特に何かマニュアルがあるわけでもない。それはフィールドワーカーであるみなさんの日常生活における人付き合いのあり方が影響してくるものとも言えます。すぐに改めて気をつけようとしてもなかなかうまく行かないことが多いものです。だから里地里山での活動はこれまでの人間関係のあり方を見直すきっかけにもなることも多いのです。

とはいえ、里地里山の人々は異なる環境、背景の元で生活をしているわけだし、また世代層もとても異なっている（たいていの場合かなり年上）ということもある。また、私たちが目指すフィールドワークや体験活動は、地域づくりへとつなげていきたいという地域住民の思いと触れあうことが大切であることから、いくつか心に留めておいてほしいこともあります。

#### (1) 徹底して聞くこと、見ること、させてもらうこと。

自分の興味関心も大切だが、まずは地元の方々がどんなことを伝えようとしているのか、どんなことを伝えたいのかに耳を傾けてみるところからはじめてみるのが大切です。

特にお世話になる方々は、里地里山で何らかの活動に取り組んでいる人たちなので、地域に対してとても熱い思いを持っています。そうした地域の方々が発信しようとしているメッセージを出発点に自分たちの興味関心へとつなげていくという姿勢がよいと思います。まずはとにかく徹底して地域の方々の話に耳を傾けること、見させてもらうこと、そして可能ならば、させてもらう（体験する）ことが重要でしょう。





### 聞くこと、みること

森の植物についてどのように暮らしにいかしているのかを教えてください。



### させてもらうこと

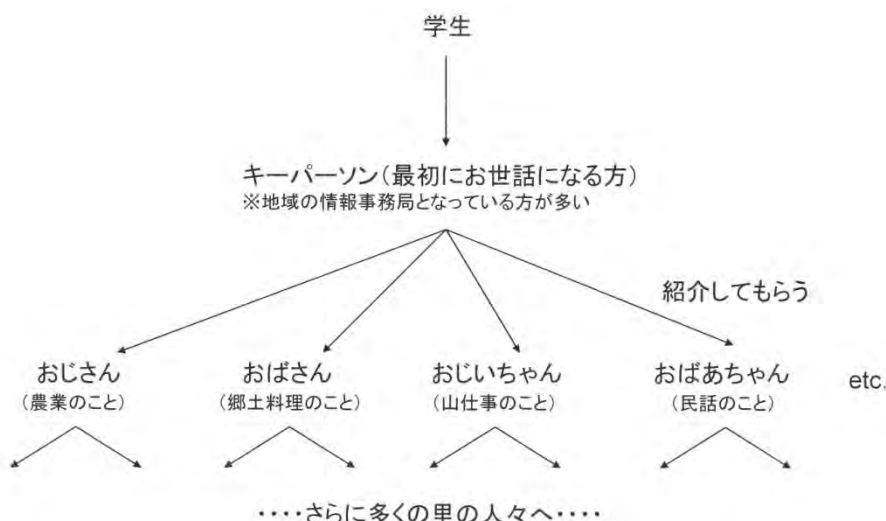
体験は楽しいし、本当に理解するための第一歩。写真は里山の間伐材を山から出しているところ。

(2) キーパーソンを出発点に地域の人々との付き合いの幅を広げていこう。

里地里山の活動でお世話になる方々は言ってみればその地域の活動のキーパーソンであると言えます。まずはこの人を出発点にして様々なお話を聞きながら、次第に他の地域の人々へと付き合いの幅を広げていきましょう。キーパーソンから徐々に人を紹介してもらえばよいでしょう。このように地域社会の人々の付き合いのネットワークへ自分も徐々に身を投じることによって、徐々にムラの構成も把握できるようになっていくでしょう。

こうしたフィールドワークのネットワーク作りを例として模式図で示すと次のようになります。

付き合いのネットワークの構築



付き合いの幅が広がるにつれてより多くの情報、その地域の知恵や技術に触れることができる。

### (3) 研究調査が進むにあたって勘案に入れること

フィールドワークによる調査研究が進むにつれ、学生は徐々に地域の様々な人たちと接触し、地域の内部状況も把握していくようになっていくでしょう。学生は単なる観光客の領域を越えて地域社会と接触していくこととなります。そうすると次の3つの要素が徐々に住民の口にのぼってきます。

- ・ 地域の政治的・社会的・経済的状況と課題
- ・ フィールドワーカーに対する地域感情
- ・ フィールドワーカーの立場性の問題

私たちが里地里山で行うフィールドワークは、地域づくりにどのようにかかわれるかということを探しているし、地域住民もそれを期待している。だから当然その地域の政治的・社会的・経済的状況やその課題といったものが地元住民の口にのぼってくる。また、フィールドワーカーに対する地域感情も出てくるだろう。平たく言えば、外部者が地域に入ることによって、受け入れをしている地域にとってはどんなメリットがあるのかということにかかわる地域感情です。冒頭述べたように里地里山地域は今大変厳しい状況にあります。だから、たいていの場合その地域の方々はどのようにそこで暮らしていくのか、どのような将来像を描いていくのかということに対してとても一生懸命です。それは里の人々にとって死活問題であるからです。

だから、こうした政治・社会・経済的課題との関係において、活動をしたり学んだりする私たちに対する地域社会の方々の感情がどんなものなのか、そのことにきちんと目を向けて行動していくことが里地里山のフィールドワークでは求められます。つまりフィールドワーカーである私たちの学習者としての、活動家としての立場性の問題が浮上してくると言えます。

### (4) 地元の方々と協同する学習のすすめ —「共育」という考え方—

そうは言っても、私たちが地域社会に対してすぐに課題の解決や地域づくりのアイデアを出せるわけではありません。地域貢献なんてものは、とても一朝一夕にできるものではないものです。しかし少なくとも地域の人々の言葉に耳を傾け、聞き役になることはできます。



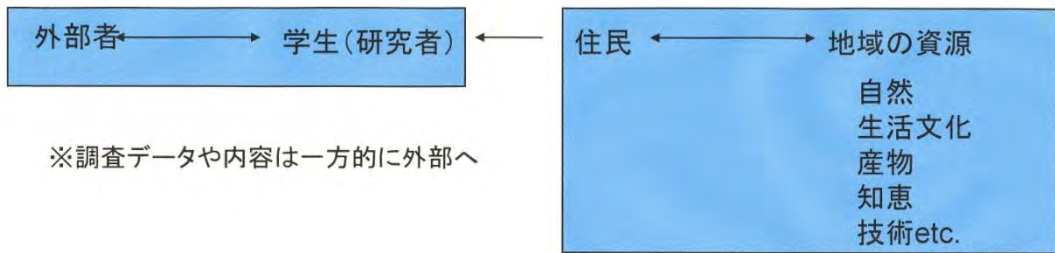
それをもう少し進めてみると、地域の方々と違って、地域の日常生活世界は、外部者（もしくは異世代）である私たちのそれとは違うので、私たちは異なる観点から質問ができます。これをもっと進めていくと地元の人と違った目線の違いを利用して質問や話題を投げかけることになり、そのことが地域の価値や可能性を再発見するためのきっかけを作ることになるかもしれないのです。

このように一方的に地域から学んだり活動場所の提供を受けただけではなく、地域の人達もその学びの活動を通して地域を再発見し、自らのことを自らで学んでいけるような双方向の学びが促進されるフィールドワークとなることが大切です。こうした共に育む学びの場を作り出すことが里地里山のフィールドワークにおいてはもっとも望ましいことだと考える。

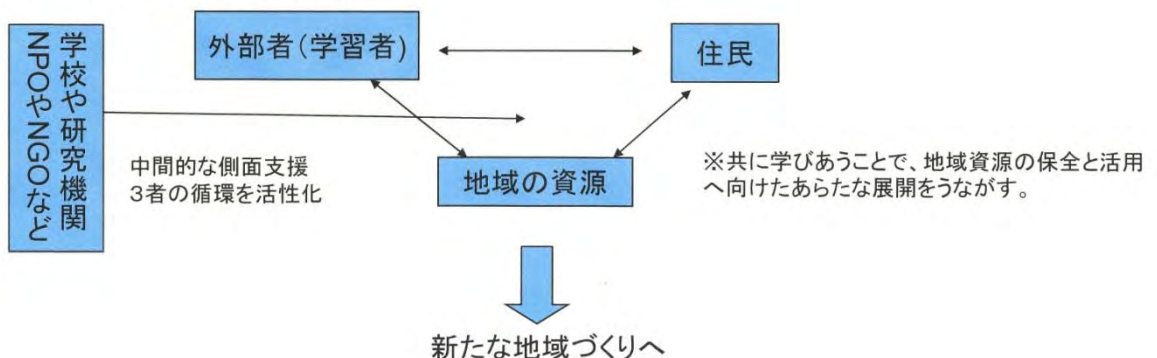
このような「共育」（共に育み育まれるという学び）を地元の人々とフィールドワーカーである私たちとの間で一緒になって構築していくことが重要です。では、具体的にはどのようにしていけばそれが可能でしょうか？次章でその手法に触れてみましょう。

### 学生（研究者）と住民の関係性の新たな構築

#### 一般的な調査研究



#### 里地里山の協同の調査研究



## 4、フィールドワークのテクニック ～「地元学」のすすめ～

### ● 里地里山活動におけるフィールドワークの特徴

一般的に言って学術的なフィールドワークでは、次のことが前提となっていると考えられる。

- A 調査者（学生）と被調査者（住民）は厳密に分離。  
調査者が被調査者を研究対象とする。
- B 調査者は特定の学問分野に所属し、研究の第一義にはその学問の発展に寄与することが求められる。
- C 発表の場は基本的には大学等の研究機関や学会である。  
したがって、必ずしも地域住民に理解可能な言語でまとめる必要はない。
- D 研究成果の社会的貢献（地域貢献）はA～Cの条件を見たしなおかつ余力がある時に行う（えばよい）。

里地里山活動にかかわるフィールドワークではこの前提が180度異なってくる。

- A 学生（外部者）と住民は共に調査・研究者でもあり学習者でもある。
- B 調査者（特に外部者・学生）は特定の学問分野に所属したり、専門家である必要は必ずしもない。むしろ無知なまっさらな姿勢で地元住民の話を引き出せる謙虚さや着眼点が必要である。
- C 発表の場は地域社会である。したがって、地域住民に理解可能な言語でかつ一般の人たちにも興味関心をそそるようなものでなければならない。
- D 研究成果（研究調査の行動自体も含めて）はその調査地域の社会的貢献が第一義的に求められる。

このように学習者が外部者として地元住民と協同的実践のフィールドワークをすすめていくためにはどのようにしたらよいでしょうか？これは従来の研究手法では十分解決できない問題をはらむことです。そこでここでは「地元学」の考え方を里地里山のフィールドワークの手法として提案してみましよう。

# 地元学のすすめ

「地元学」は、地元学ぶということです。自分たちが暮らす地域のことを外部者（ヨソモン）の目を借りて、一緒に歩き、調べる。そのことによって地元住民だけでは当たり前すぎて気づかなかったことに気づいたり、新しい発見が生まれたりする可能性が出てきます。そのようにして地域で見つけたことを地域で話し合い、これからの地域づくりを住民と一緒に住民の思いを土台にして考える、そのきっかけが地元学です。どこかの誰かやヨソの誰かのためにやる学問ではない。その地域で、学生でも住民でも、調べた人、参加した人だけが地元のことにさらに詳しくなれます。

里地里山は、そこに住む地域の人々が長年暮らしていくために作った自然であり文化の総体であると言えます。だからそこに学びながらさらに里づくりにもかかわるといふ時に、このような基本的な考え方が大切でしょう。つまり地域住民の日常の生活世界、そこにはその土地とそこに住む人の知恵や技術が埋め込まれているわけですが、そこから学び、共に体験・経験を楽しみあおうとする姿勢です。そんなこんな考え方をすすめる調査の手法なので、当然決まった型はありません。でも一つの例として次のようなやり方が参考になるでしょう。

## 地元学実施のために

### 1、基本的なすること

地域の人とよそモンと一緒に集落を歩いて、「あるもの探し」をする。



### 2、地元学調査（調査方法はいたって簡単）

ステップ1:じいちゃん、ばあちゃん、その他集落の人、よそものが集まる。

ステップ2:集落や集落の周辺地域をいっしょにまわり、よそものが面白そうだと思うことやものを集落の人に質問し、それを写真に撮り、集落の方の説明を資源カードに記入していく。



ステップ3:調査からかえってきたら、その結果をカードをもとに発表。（→地域内コミュニケーションの活性化と情報の共有化）

ステップ4:調査からかえってきたら、その資源カードをもとに地図に書き込んでいく。また資源カードを整理し、一覧表を作ります。



↓  
地域環境マップと生活文化大百科の出来上がり



# 地元学における着眼点の例

- **I. 歩くところ**
- 水のゆくえ
- 集落の生活文化
  
- **II あるもの探しの視点**
- 水の行方：家の水はどこから来ていますか？どこへ流れていきますか？
- 有用植物：イエの周りで、食べられる植物、薬になる植物はどこにありますか？
- いい伝え：自然神はどこにありますか。その神様は何の神様で、どういう意味ですか？
- 鎮守の森：水源や自然神の周囲にはどのような樹木が生えていますか？
- 生き物：家の周りの川や野山にはどのような生き物がいますか？
- 昔遊び：おじいさん、おばあさんは、昔どのような遊びをしていましたか？
- 地域の知恵袋：集落にはどのような人が住んでいますか？
- 地域資源：集落の人が大切にしている場所、もの、宝物は何ですか？
- 食べ物：家の周りではどのような野菜や食べ物を作っていますか？
- もののゆくえ：食べ物、道具、木材、ゴミなどは、どこから来て、どこへ行きますか？
  
- **III 何をするのか？**
- 話を聞く：一緒に歩いていて見つけたもの、写真にとってもの等、地元での名前や呼び方、使い方、食べ方、物語を地元の人に聞き、資源カードに記入する。
- 写真を撮る：歩いていて見つけたもの、気がついたこと、驚いたこと等を写真に撮る。写真を撮った場所を、地図に書き入れる。

(以上、里地ネットワーク「地元学へようこそ」参考)

# 調査手法の実際

地元学の調査で使われるのは次の5つの手法に大別できます。実際の場面ではこれらが組み合わさって使われます

- (1) **聞き書き**：基本中の基本。地域の人に出会って、話を引き出せなければ何も始まらない。まずは地元の方々の言葉に耳を傾けよう。そしてそれを地元の言葉で記録していく。



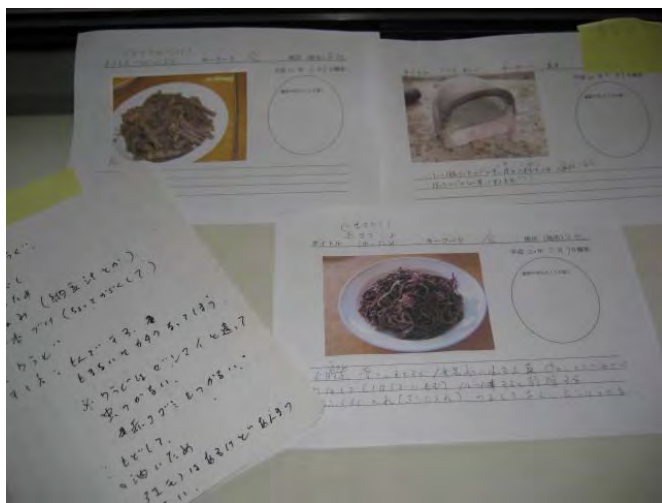
## 聞き書きの様子

里地里山では、具体的なものを前にして話を聞くことがわかりやすく説明してもらうためのポイントです。

- (2) **フィールドノート・カード**：聞き書きしたメモや写真をフィールドノートにまとめる（感じたことや地元の人じゃない人でも分かるような解説を加える等）。カードを活用すると、要素ごとにまとめることができるほか、それを広げて住民と視覚的に情報を共有することができるという利点があります。

## 資源カードとフィールドノートの例

地域の人々の声を生かして書く。  
難しく書く必要はない。



### (3) 地図：

位置関係や空間の把握に役立つ。また、地域環境を把握するのに役立つ。直接的な効果としては、視覚的に全体像を示すことができるため、地元の方々が大変興味を持つことが多い。地図を色分けしたり情報を書き込んでいく作業はぜひ住民といっしょにやってみましょう。地図の作業をしながらより多くの話を聞くことができるでしょう。



#### 地図の作成作業

地域の状況が地図上で浮き彫りになっていく。地元住民と行うことで関心が高まり、よりさまざまなことを聞き出すきっかけともなる。

### (4) 写真・ビデオ

里地里山の自然や文化、知恵や技術は、なかなか聞いただけでは分からない。

見て、さらにはやってみてはじめて分かるということが多いものです。文章表現の限界を超えて表現不可能な私たちの日常生活とあまりにも異なる「もの」や「こと」も数多くあります。この時に役に立つのが写真やビデオです。

これは記録として役立つだけした写真やビデオを見せて、地元の人が話すというメリットもあります。

#### 写真の整理作業

この作業が結構楽しい。  
地域の人たちと一緒にやろう。





## (5) ワークショップ

カード作り、地図作り、写真やビデオの整理などは私たち学習者だけではなく地元の住民もいっしょに行うことができます。そのように調査の作業を共にすすめていく事で、より興味深い分野を発見したり、調べてきた事がもっと深まったり、地域の再発見につながります。また、新たな地域づくりのアイデアが出てきたりします。そのように住民に教わり、共に学びあい（共育）、調査の計画から整理まで研究作業をいっしょに進めていく事、そして研究調査の成果を共有しあう事が里地里山のフィールドワークでは重要です。ワークショップはあらゆる場面や段階で設定して行うこと事をおすすめします。



### ワークショップの風景

地図を囲んで地域のことを話し合う。実際に調べたものを元に世代を超えて話題を持つことができる。

### ワークショップの風景

調べたことを元に住民とともに発表会



## 5、調査の整理方法

調べたことを整理する方法は、対象によって異なりますが、ある程度自分が直感的に理解できるやり方が望ましいと言えます。またその地域独特の認識による分類方法があるので、そういったことも勘案に入れて整理していきましょう。とにかく過度に複雑に分類してもあとでなかなか活用できないということがあります。

必要に応じて、すぐに活用できて、さらに状況によって変幻自在に組み合わせて使用できるような、単純で分かりやすい整理方法を心がけましょう。

### ● 視覚化

調べた事を視覚化することは大変重要。手早く使えるのは次のもの。

- ・ 地図（絵地図等も含む）
- ・ 写真（活動写真等も含む）
- ・ イラスト（必ずしもうまく書く必要はない）

### ● 耳で聞いて分かる言葉で

まとめ方も地元の住民も理解できるように「耳で聞いてわかる」書き方が重要です。特に里地里山地域の場合、プレゼンテーションは学校等の教育や研究の関係者だけではなく地元の住民も聞きにきます。そして調査の成果が地域と共有でき、地域づくりにもつながるものが求められます。

文章でないと分からない難しい言葉や専門用語で武装して「何となく分かった」というような書き方や整理の仕方では、いざ発表や成果報告をする際に役に立ちません。地元の語り口調を生かした整理を心がけましょう。もちろん学術研究用語や専門用語を注として加えて説明しておくことで理解や整理がよりうまくできるのであればそれは付け加えて可です。

### ● 構造化

まとめたそれぞれの情報は、相互の情報のつながりや構造が見える形での整理しておくことが便利です。写真やまとめたメモ、地図等はつながりやカテゴリーごとにファイル（紙でもデータでもよい）して整理しておきましょう。

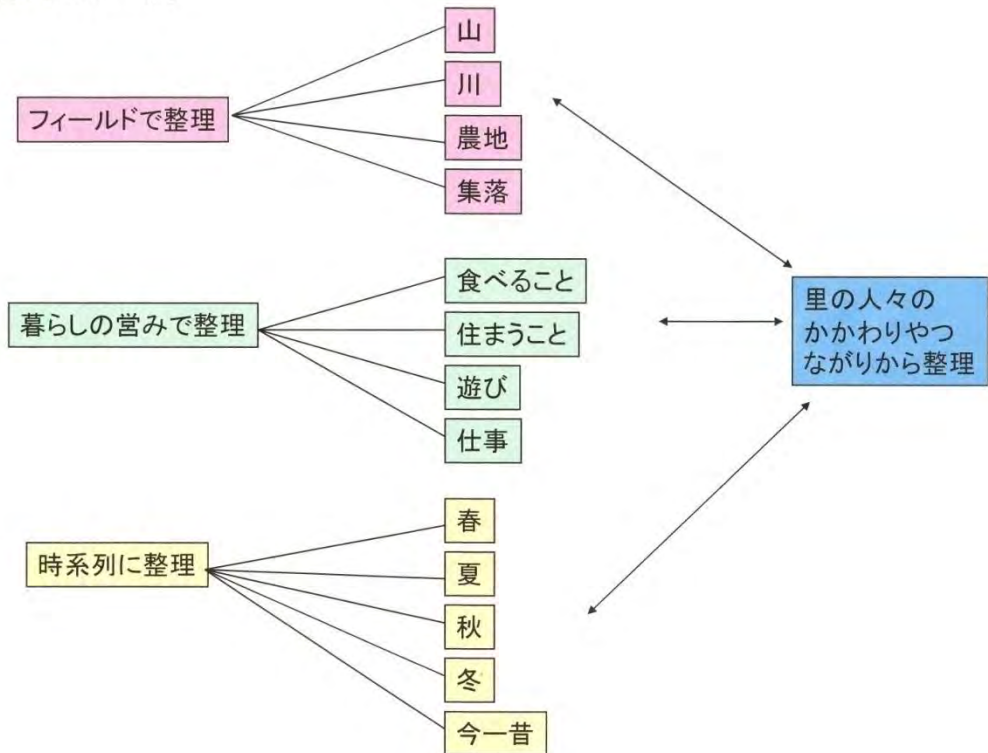
以上のことは、記憶が薄れる前に調査後速やかにしておく事がポイントです。

## 視覚化

利用できるものを最大限駆使してよく見える形でわかりやすく整理しよう。  
右写真は調べたことを地形図にまとめているところ。



## 構造化の一例



## 構造化

上の図はあくまでも一例です。地元の人々の認識スタイルや取り組もうとしている里地里山の活動分野によって異なる整理方法が有効である場合に留意しましょう。



## 6、成果物の還元と地域づくりへの貢献

たいていの場合、前節のように調べたものを地域の人たちと共に分かりやすく整理した時点で、里地里山のフィールドワークの大部分は終了したと言えます。そこから地域の実像やどのような地域づくり計画が考えられるかが浮き彫りになってくるからです。後はそれを地域の人たちとワークショップやプレゼンテーションを通して共有していただくだけです。心がけるのはとにかく地域の人々の声を反映して分かりやすい言葉遣いと論理で説明すること。ここで安易に横文字を使用することはおすすりできません。

### ● 調査から地域づくりへ向かう3段階

調べた素材から地域づくりのための発想、計画、行動が開始されます。地域計画作りから実践へ向かうための各段階の基本的な姿勢は次の3点に集約されます

ステップ1 発想：自由に

ステップ2 計画：慎重に

ステップ3 行動：大胆に

(参考 「地元学ネットワーク」主宰 吉本哲郎氏談)

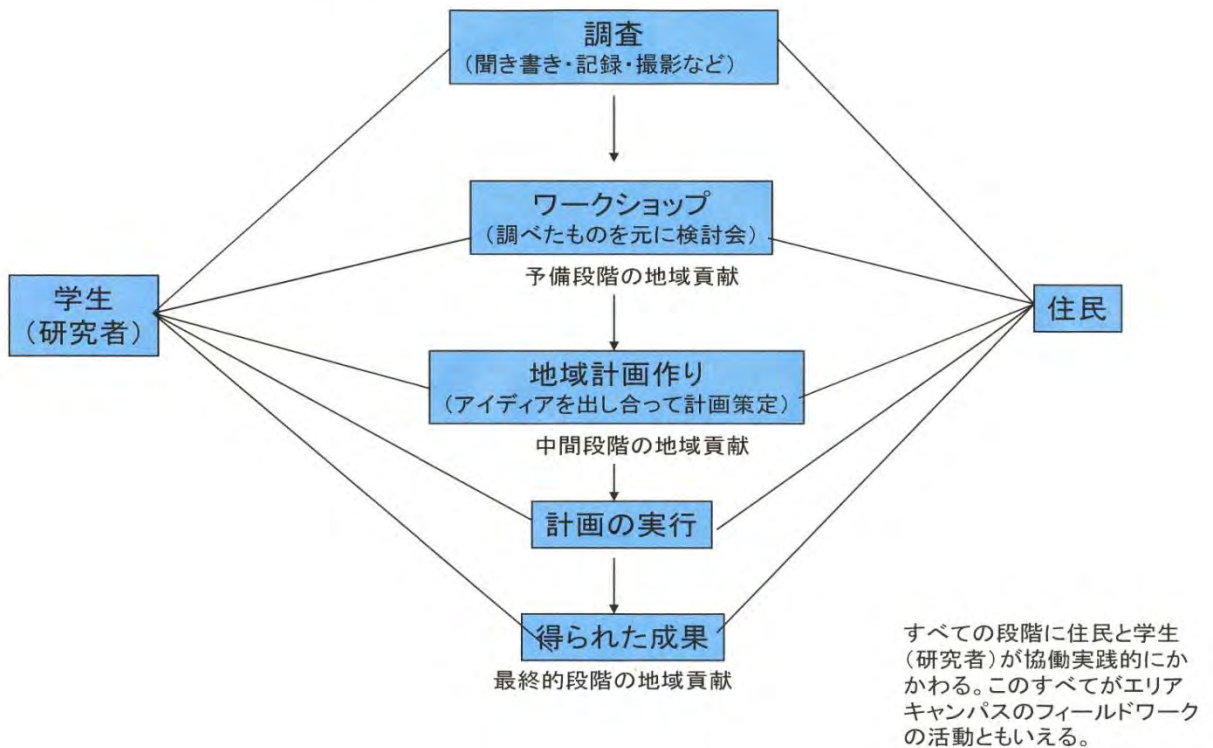
### ● 行動後の成果は迅速に

調べっぱなしでは、地域からも不満も出てきます。それは従来の一方的な調査研究のあり方と同じからです。だから調べた後はなるべく早い段階で結果報告を行い、ここで地域づくりの計画ができたなら、即行動、そして実践後はなるべく早い段階でどんなに小さくてもよいから成果をあげて、住民に見せること。その事によって、地域住民のモチベーションがぐっと高まる。

### ● 調査研究後の付き合いこそが大切

里地里山の学習のためのフィールドワークはあくまでも地域づくりのきっかけに過ぎない。大切なのはその後、継続して長く地域とつきあっていけるかということです。また調べたこと、そこで活動した事が、本当に地域の方々と共有され、地域づくりの展開によりよい影響を与えているかどうかということでしょう。

そのためにも、里地里山のフィールドワークをきっかけにしてその後も長く地域にかかわりながら、より高度な研究調査（地域の人々と共有できる点で）や地域づくりの実践にかかわりたいものです。そこからきっと新しい日本の原風景とも言えるすばらしい地域社会が生み出されることでしょう。



里地里山における学習活動は大変先進的で刺激的な教育実践だと言われます。それは、従来の研究教育の枠を大きく超えて、地域と共に新たな暮らしのあり方を模索する姿勢にあるように思えます。このことは、里の人々と外部者が共に新たな日本のふるさとを作っていくことを考えたとき、大きな可能性を感じさせるものと言えます。

なぜなら、単なる趣味の学習活動のように、里地里山での学びは特定の学問分野の垣根に安住するのを許さないし、部内者のみでの評価に安住することも許さない性質のもので、本当に地域社会に対してその地域の発展や期待に効果をもたらしているかどうか問われるものと言えるでしょう。

本稿で基本的に主張したのはとにかく地元の人々から「よく聞くこと」です。専門的な研究や教育はそのレベルがあがれば上がるほど、他人の事を聞かなくなるといった傾向があるようです。人は学問が進むと分かったつもりになってしまう。そして逆に他人を指導しよとし、教えようとする。だが、それでは本当の里地里山の実相やこれからの地域づくりにつながる実のある研究教育はできません。現地の人々の声に謙虚に耳を傾け、それを現地の人も分かるような形で表現をしていくこと。この愚直な活動の積み重ねが、大きな地域貢献と研究教育の成果を生むだろうと考えるからです。

次のⅡ部では、山形県最上・庄内地方の具体的な事例から解説します。

## 里山

～里の恵みとまたぎの文化を育む～

角川の里山は、日常的に地域住民によって利用されています。そこでの恵みは地域の生活を様々な面で支えると同時に、そのため智恵や技術、またぎの文化を育んできました。

### 1、間伐学習会

里山は、人が木を切ったり、下草を刈ったり、枝打ちをするなど手入れをすることで保全されています。こうした活動を杉林を中心に行っています。



### 2、山菜・キノコ狩り

里山の恵みは何と言っても春の山菜と秋のキノコ。角川では多種多様な山菜とキノコがとれます。それを干したり付けたりしながら、さらに深い味わいの山村ならではの料理ができあがります。

保存することもでき、一年中山村の味覚を味わうことができますそれは地元の方々の採集の智恵と技術によってはじめて可能となるのです。

地域の先生から山菜やキノコをはじめとして、食べられる植物や薬になる植物について聞いてみましょう。

メモ

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---



### 3、里山散策会

角川での里山散策会は、ただ単に歩いて景色を楽しむだけではありません。実際に昔、山仕事で使っていた山道を保全したり、もの作りの材料となるツタを集めたり、食べられる植物や薬になる植物を集めたり、様々なことを行います。

自然とともに、そして自然に働きかけながら、暮らしに役立つ智恵や技術を体験し学びながら歩いていきます。



### 4、炭焼き

角川の里はかつて有名な炭焼きの里でした。今、学習のための本格的な炭焼き窯が設置されています。木の切り出し、薪割り、火入れ、炭出しなど複合的な山仕事の結晶が炭焼きの技術です。近年炭の消臭効果やエネルギー源として新たな脚光を浴びつつあります。



### 5、またぎ猟

里山のプロがまさにまたぎ(山の猟師)です。山の動物はもとより植物や生態系を実践的に把握し、その恵みを生活に生かしています。自然生態系とともに生きることを彼らの話から示唆させられることも多いでしょう。角川には40名ほどのまたぎがいます。かんじきをはいて冬にはウサギの巻き狩りの体験などもします。

# 川とため池

～里の水辺環境と生き物調査の魅力～

## 水辺の生き物観察～基本は玉網でガシャガシャ～

角川の里では、人々が暮らせるために、山の出水を集落に引き込んだり、用水路を整備したり、ため池を作ったりと多様な水辺環境があります。そこにはサンショウウオ、イモリ、ゲンゴロウ、フナ、ヌマエビなど、多種多様な生き物が棲息しています。そのような生き物達に出会うには、玉網を持って、水路やため池をガシャガシャさってみましょう。たくさんの生き物達を見つけることができるでしょう。



## 1、源流探検～浄の滝とヒメサユリ～

角川の源流は、浄の滝と呼ばれる滝になっています。かつて月山へ向かう修験者がここで身を浄めたのでこの名前がついたと言われています。

毎年6月頃には、村の花であるヒメサユリが咲き乱れます。この時期に「浄の滝ヒメサユリ観察会」を開催し、地元のまたぎのおじさん達と、浄の滝まで子ども達と出かけます。タケノコや山菜などを採りながら、浄の滝まで向かい、ヒメサユリの花を観察し、源流の水で流しそうめんをします。

子ども達が源流の森と水を体験しながら、山の恵みの取り方、火の起こし方、山歩きの技術、月山信仰の歴史などを学ぶことができるプログラムです。





## 2、溪流の生き物調べ

角川はイワナやヤマメが数多く生息する溪流としても知られています。地元の漁師は、様々な漁法を駆使して、これらの川の恵みをえてきました。5月には山形県の県魚にもなっている「サクラマス」が遡上し、10月にはサケが遡上してきます。いずれも60センチを超える大型魚です。8月以降はモクズガニがとれます。

地元の川の先生による溪流釣り講習会やモクズガニの捕獲体験、投網見学などを通して、溪流の生態系や生き物達について学びます。また、川は常に地域の生活と共にあることから、保全活動も重要です。南部里地探検隊と連携して川の保全活動や水質調査も一緒に行っています。



## 3、ため池の生き物調べ

棚田で使うために角川の里には数多くのため池があります。そのため池とそれらを接続する水路、湧水池には数多くの生き物が棲息しています。興味深いことはちょっと推計が異なったり、水温や水深が変わると生物層ががらっと変わるということ。そして季節によって生息している生物もがらっと変わることでしょう。そして人が手入れをすることで生き物が増えたり減ったり、様々な反応がすぐ出てくるのです。そして何よりも地域農業を支える貴重な水。皆で保全し、多くの生き物達とともに共生する水辺環境を整えていきましょう。



## 4、最上峡いかだ・カヌー体験

最上峡は山間部から庄内平野をつなぐ最上川がもっとも細くなる動脈。ここは最上川が最も急流となるダイナミックな自然が広がっています。内陸と海辺をつなぐ自然生態系と文化の道でもあります。サクラマスやサケなどが海から遡上し、方言が異なる最上と庄内地方の双方の人々が行き来する。そんな最上峡を川を目線から体験しましょう。





# 田んぼ～自然と共生する米づくりを目指して～

## 田んぼの学校プログラム

本郷山田と呼ばれる棚田の湧水できれいな水に生息すると言われるサンショウウオの群集落が発見されたことをきっかけにその水を使って環境に優しい米づくりに取り組もうと始まったのが、角川の里「田んぼの学校」プログラムです。子ども達とともに無農薬による米づくりに取り組んでいます。この活動は地区全体に波及しつつあり、里地里山ビオトープ(→p.12)の活動と一体となって、減農薬、無農薬、体験田んぼの活動が活性化しています。

### 1、田植え (5月下旬～6月初旬)

田植えは、近年はほとんど機械で行うようになりましたが、田んぼの学校では伝統的な手植えをします。泥の感触を楽しみながら一本一本丁寧に植えていきます。田植え時期は様々な生き物が出てくる頃でもあります。へびやカエルやらとの突然のちよつとびつくりする出会いもあることでしょう。収穫を夢見て楽しく皆で作業です。

### 2、田の草取り (6月下旬～7月)

無農薬の米づくりは草との戦いでもあります。時期を逃して放っておくと大変です。1番草、2番草、3番草と暑い時期ですが3回程田んぼに入って草取りをします。手押しの除草機の力を借りながら、なるべく農薬に頼らない米づくり、安全な米づくりを子ども達とともに実践します。

田んぼに入る時にはくれぐれも長袖長ズボンで。稲の葉に当たると「イナウルシ」といって3日程度でなおりますが肌にぶつぶつができてしまいますからね。



### 3、稲刈りとはせかけ(9月~10月)

いよいよ収穫！手刈りで刈って、それを皆でハセガケします。角川の里は、秋、湿気が多く長雨も続きますので、クイガケではなく、皆ハセガケで乾燥させます。自然乾燥は手間もかかりますがそのお米は粘り気があって大変おいしいものとなります。とにかくハセに掛けた稲は圧巻。達成感を感じるひとときです。



### 4、脱穀(10月~11月)

脱穀作業も伝統の足踏み脱穀機を使用して行います。結構ほこりまみれで大変な作業ですが、なつかしいゴトゴトという音ともにお米が徐々に姿を現します。

ここまで来るともう少しで食べることができますね。



### 5、餅つきと収穫の喜び(12月)

恒例の餅つき大会。伝統の臼と杵で、つきあげていきます。子ども達にとってはちょっとした力仕事、でもやっているうちにコツをつかんでどんだんうまくなります。

あんこ餅、きな粉餅、納豆餅、雑煮餅など多種多様な味付けと加工で楽しめます。

### メモ

---

---

---

---

---

---

---

---



# 畑～無農薬野菜と伝承野菜の栽培～

角川の里は肘折火山の影響で堆積した水はけの良い野菜づくりに適した畑があちこちにあります。ブナの森の里山、かつての城跡嘉門楯にある畑が当学校のフィールド

「畑の学校」となっています。遠くに高倉山を望みながらの作業は大変気持ちのよいものです。

フィールドでは畑の先生が農山村の畑作のありかたを懇切丁寧に説明します。



## 1、無農薬の野菜づくり

### ・大豆づくり

…角川の里はかつてみそ、豆腐、納豆づくりが各家で行われていました。そうした加工技術を今に生かして、無農薬大豆を利用したみそづくり、豆腐づくり、納豆づくりに取り組んでいます。

### ・ジャガイモづくり

…夏は川遊びのあとジャガイモ汁で身体を温めるというのが角川の伝統的な流儀です。というわけで夏の芋煮といえばジャガイモ。その他さまざまな郷土料理にも使用されます。

### ・サトイモづくり

…地元では「イモノコ」とも呼ばれています。秋の集落恒例行事、芋煮会で大活躍します。

※以上の品種を中心に、畑の学校は6月～11月にかけて季節ごとの作業をプログラム化し実施しています。





## 2、伝統農法の実践～焼き畑～

夏の暑い時期(7月下旬から8月上旬)、草を刈って、火をつけます。その灰をトラクターで畑にすきこんで、栄養分のある土を作り、野菜の種をまいて秋に収穫する伝統農法です。毎年条件の良い場所を選定し少しずつ場所を変えながら自然に負荷のかからないように実施されます。汗まみれでの作業ですが、良い作物を収穫するためには欠かせません。当学校のプログラムでは次節で説明する伝承野菜「角川カブ」の生産のために行っています。



## 3、伝承野菜の保全

里には伝統的に受け継がれたその土地ならではの野菜が存在します。角川カブはそのうちの一つです。赤カブで、大根のような形を下角川カブは独特の歯ごたえと香ばしさが売りです。砂糖と酢で漬けるカブ漬けが最もおいしく、血液のさらさら効果もあるとのこと。子ども達とは夏から生産に取り組み食農教育の重要な素材の一つとなっています。

このように取り組みながら地域独自の作物を保全し次世代に伝えようとしています。



メモ

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---